

- ▼ 『東方』328号より
 — 新訳で読む狄公案あるいは狄(ディー)判事の物語(下)
 ▲ 那須野 巧

『東方』三二八号より

新訳で読む狄公案

あるいは狄判事の物語(下)

那須野 巧(中国語教師)

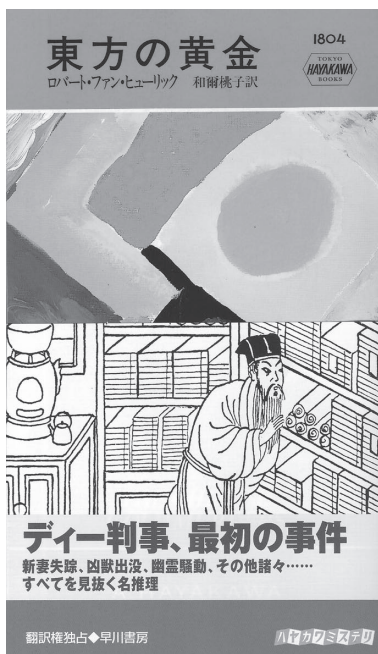
狄判事の物語の開幕を飾るロバート・ファン・ヒューリック著『東方の黄金』(和爾桃子訳、早川書房ポケットミステリー、二〇〇七年)では、最初の任地に赴く若き日の狄仁傑の活躍が描かれる。唐の都から老僕ひとりを従え、何者かに毒殺された知事の後任として山東省の田舎町へ向かう旅の途中、馬に乗った二人組の野盗に襲われる。不覚にも家伝の名刀雨龍は従者に預けてあった。馬と身ぐるみ置いていけ、小役人め!と脅す剣を持った大男(馬茶)の後方では、弓を構えた相棒(喬泰)が狙いをつける。義賊ならそれを示してみろと真剣の勝負を提案する狄判事に興味を示した野盗の剣客。弓を構える相棒がそれを制して「遊んでる暇はない。馬を取上げてとっとと放り出せ」と言ったのに対して狄判事が言う:

“Just as I thought,” Magistrate Dee said contemptuously: “Big words but small hearts!”

The large man cursed violently. He stepped up to Hoong’s horse, grabbed the sword the graybeard was carrying and threw it to the magistrate, who caught it and quickly took off his traveling robe. He parted his long beard and knotted the two strands together behind his neck. Drawing his sword, he said to the ruffian, “Whatever happens you’ll let the old man go

トップページにもどる

ロバート・ファン・ヒューリック著／和爾桃子訳
 『東方の黄金』ほか
 新書判・一九五頁・早川書房・一、〇五〇円



free!” (*The Chinese Gold Murders*, Chicago University Press, 1979)

「やはりな」と、知事がさげすむ。「大口のわりに、吹けば飛ぶような肝っ玉だ!」

はじめの大男がすごい剣幕で悪態をつき、洪に近づくと剣をわしづかみにして知事に放ってよこした。その剣を受けとった知事が手早く旅行着を脱いで長いひげを二つに分け、うなじで束ねる。剣を抜きながら賊に言った。「結果はどうあれ、老人は無傷で放してやれ!」(和爾訳)

「果不出我所料、」狄公冷眼道:「真是大言大慚、膽小如鼠之輩!」

持剣壯漢聞言勃然大怒、一躍至洪亮馬前、一把「下洪亮背上的寶劍、將劍擲與狄公。狄公接劍在手、又從容將

領下長髯分為兩股結繫於頸後，然後拔劍趨前道：「交戰之前我有一事相告，二位若是明理之人，則無論勝負皆不許傷害這位老者！」（《黃金奇案》陳海東訳、臉譜出版、二〇〇〇年）

中文訳では狄判事の最後の科白に少し脚色がある。「剣を交える前にひとことだけ言っておく。おまえたち二人がもし道理をわきまえる者ならば、勝負の結果はどうあれ、この老人を傷つけることは断じて許さん！」とはいえ中文訳は英語の原文をきちんと尊重し、それに白話小説独特の表現を加味した風格ある文体で、読んでいて実に痛快だ。ヒューリックの活劇場面の筆致はなかなかのもの。緊迫した空気と躍動感はあるで中国の歴史ドラマのアクションシーンを思わせる。しかも判事は野盗との真剣勝負の前に長いひげを二つに分けてうなじで束ねるなど、実に意表をつく描写としても知られる名場面である。

宝剣雨龍の威力が冴えて二人の野盗と互角の勝負を交えた狄判事。その人柄に惚れ込んだ二人はのちに副官として任せ、知事を助けて関羽と張飛ばりの大活躍することになる。やがて主従四人が任地の平来（山東省の架空の町）に近づき雨を避けて一休みしていたとき、副官となった喬泰^{チヤオ・タイ}が狄判事の名刀雨龍を見せて欲しいと願い出る。三百年前に刀鍛冶の奥義を究めた三本指の遺作となった最高峰の名剣であり、判事からその恐ろしい由来の伝説が語られたあとで、喬泰が剣をじっくりと検分する。

Chiao Tai pulled his neckcloth over his nose and mouth so as not to soil the blade with his breath. Then he drew it from the scabbard. Raising it reverently in

トップページにもどる

both hands, he admired its dark-green sheen, and its hair-sharp edge that did not show a single nick. His eyes shone with a mystic fire as he spoke. "If it should be ordained that ever I should die by the sword, I pray that it may be this blade that is washed in my blood!"
With a deep bow he handed the sword back to Magistrate Dee.

喬泰^{チヤオ・タイ}は鼻と口に首布を引き上げて息がかからないようにし、鞘走らせた刀身を捧げ持って毛筋のきずもない暗緑の刃をめだ。こう口にしながら、この世ならぬ炎をちらちらと目に宿す。「剣によって死ぬさだめとあらば、わが血を吸うのがこの剣でありますように！」
深々と一礼して狄^{ディー}知事に剣を返した。（和爾訳）

喬泰聽罷，不由得忙以襟掩口，生怕口中氣息了面前的雨龍寶劍。他將雨龍劍從劍鞘中小心抽出，恭恭敬敬地用雙手捧起觀賞，只見劍身寒光閃爍，劍刃鋒利無比，未有絲毫捲刃崩口之處。喬泰讚不絕口，眼中放射出異樣的光彩，自語道：「若是我命該喪於劍下，我願以血洗劍，死於此劍之下。」言罷，躬身深施一禮，將劍奉還狄公。（陳海東訳）

伝説の名剣のもつ妖しい雰囲気と剣に魅入られた男の描写が凄まじいまでにリアルだ。そして喬泰の語ったそのひとことが、シリーズ十六作品最期の場面へとつながるきわめて重要な伏線となるのである。ちなみに狄判事の最期の事件を描いた『南海の金鈴』は、嬉しいことにすでに和爾桃子訳がポケットミステリーに収録されているので、気に

なるかたは『南海』を先に読んでみるのも悪くない。それにより興がそがれることはないどころか、かえって他の作品への抑えがたい興味が増すことは確実だと断言できる。

これから狄判事の物語を読んでみようと思うかたへの案内として、小説世界の時間の流れに沿って事件を時系列に配列しなおしてみた。作品タイトルはポケミス所収の和爾桃子の新訳によるが、未訳の作品については旧訳書名あるいは*を付した仮題を掲げておく。

〔舞台〕 平来…日本と朝鮮との交易で栄える山東省の架空の港湾都市

(1)『東方の黄金』 (2)『五色の雲』 (3)『赤い紐』 (4)『鶯鶯の恋人』 (2)(3)(4)は『五色の雲』所収の短編 (5)『四季屏風殺人事件』(松平いを子訳)

〔舞台〕 漢源…首都から遠くない大きな湖に臨む山間の架空の町

(6)『中国湖水殺人事件』(大室幹雄訳) (7)『*猿の朝』(『*猿と虎』所収…未訳) (8)『雷鳴の夜』 (9)『青蛙』(『五色の雲』所収の短編)

〔舞台〕 蒲陽…江南の江蘇省の架空都市

(10)『中国梵鐘殺人事件』(松平訳) (11)『化生燈』 (12)『すりかえ』 (11)(12)は『五色の雲』所収の短編 (13)『紅楼の悪夢』(14)『白夫人の幻』(15)『真珠の首飾』 (16)『観月の宴』

〔舞台〕 蘭坊…チュルク系の異民族の住む西北の边境の架空都市

(17)『中国迷路殺人事件』(松平訳) (18)『西沙の柩』 (19)『小宝』(18)(19)は『五色の雲』所収の短編 (20)『紫雲の怪』

〔舞台〕 北州…北方边境の架空都市

(21)『北雪の釘』 (22)『*虎の夜』(『*猿と虎』所収…未訳)

トップページにもどる

〔舞台〕 首都

(23)『柳園の壺』

〔舞台〕 広州…南方広東の実在の都市

(24)『南海の金鈴』

作者のヒューリックについては、すでに優れた人物紹介がいくつもある。日本語で書かれた読みやすいものでは、中野美代子『仙界とポルノグラフィ』(青土社、一九八九年)所収の『ディー判官もの』の作者、そしてヒューリックの遺作となった研究書 *Gibbon in China* の邦訳『中国のテナガザル』(博品社、一九九二年)巻末の中野美代子教授による「訳者あとがき」を参照。いずれも天才オリエンタリストの面目と魅力を余す所なく伝えてくれる。作品シリーズについての解説では、中公文庫『四季風殺人事件』附載の松平いを子による「三つの生 ファン・フリーリックとディー判事シリーズ」がよい。どのように作品群を構想して執筆したのか、原著者による創作の経緯と背景についての解説を含む優れた作品論となっている。また『北雪の釘』には和爾桃子による「西方の文人・高羅佩」が特別附録として掲載されているほか、新訳の各巻に添えられた訳者あとがきも楽しい。翻訳にあたって参照した資料を惜しげもなく披露してヒューリックの描写する中国世界の文化的な基礎知識を読者に伝え、翻訳上の工夫についても触れつつ作品世界の奥行きへと案内してくれる。また和爾桃子は著者の遺族に直接確認して名前のカタカナ表記をヒューリックと訂正した。本稿もこの新しい表記に従ったが、引用の場合には旧訳に見えるフリーリックあるいはフリークといった表記をそのまま尊重している。

ひとつだけ気になったのは、原著はピンインの普及前に

刊行されたため、人名地名は英語圏の読者向けのやや旧式の表記法を使用している。これをそのままカタカナに写すと江蘇(↑ジアンスウ)省、廉(↑リエン)医師のように現代中国語音とズレてしまうので、中国語学習者が増えた現在の状況下では、違和感を覚える読者も少なくないだろう。現代語にあわせたカタカナ表記に改めてよかったのではないだろうか。

中国では数年前から狄仁傑を主人公にした連続テレビドラマが人気を博し、狄仁傑の名前は若い人の間でもよく知られるようになった。最初のドラマは大陸出版の漢語訳『大唐狄公案』(海南出版社&三環出版社、二〇〇六年再刊)にもとづき、番組のタイトルにも「荷」高羅佩原著の文字が表示される。しかし登場人物や事件の大筋はヒューリックの作品を踏まえるものの、いくつかのエピソードを強引にげてしまうなど、改編された翻訳をもとにさらに編集を加えた結果、原作の風格と面白さを活かすことができなかった。馬榮と喬泰の登場する場面も漢語訳の脚色にもとづき、原作の真剣勝負の緊迫した場面はなく、まるで人情話ふうの演出になってしまっている。また喬泰が名剣雨龍に魅入られて誓願を立てる場面は、漢語訳では全く削除されており、ドラマにもこの場面はない。

やがて九十年代に宋代の名裁判官包青天の連続テレビ劇が一大ブームを巻き起こした後、『神探狄仁傑』というタイトルの新作ドラマが放映されて人気が高まる。こちらは活劇あり謎解きありの連続歴史ドラマで、カンフーやワイヤアクションを多用した現代的な演出も洗練されている。新シリーズの狄仁傑は武則天の密命を受けて潜入捜査を行ない、帝国を揺るがす密謀の謎を解き、不正や悪を暴くという設定で、ヒューリックの作品とは全く関係のない創作

▶ トップページにもどる

ドラマであった。とはいえ、人気を博した背景には、このドラマのほうにむしろ中国の公案小説の伝統を踏まえていて中国人の嗜好に合っていたという事情がある。興味のあるかたは中国の小説『狄公案(武則天四大奇案)』の簡約版である『狄仁傑の不思議な事件簿』(有坂正三編訳、文芸社、二〇〇七年)を一読されるといいだろう。また公案小説については、日本で人気の水戸黄門の漫遊記を題材に、中国の伝統文学である公案小説との比較において、物語の構成要素をさまざまな角度から分析した金海南『水戸黄門「漫遊」考』(新人物往来社、一九九九年)がとても優れた解説である。あわせて一読を勧めたい。